


マネージメント・レター 228
伝説の武勇伝が社の伝統を醸成する

『会社の品格』の著者小笹芳央氏は、著書の中で「そもそも会社とは人々の欲望を実現するための措置として人間が発明したシステムであり何よりもまず利益追求が優先され、経済合理軸一辺倒で動く性質をもつもの。よってもともと会社は不祥事を起こしやすい宿命を生来負っている」と指摘しています。企業の不祥事が多数報道される昨今個々の事例をみると「会社」が持つこの性質が野放しにされ、さらには本来この性質を御する立場にある経営者が、目先の利益を獲得せんがために逆に先導してしまったり、見て見ぬふりをした結果であることも多いようです。同じ企業内部の社員一人ひとりには「誰かの役に立ちたい」「誇りある仕事がしたい」「仕事を通じて自己を成長させたい」など各人のモチベーションを持っているものです。企業の不祥事は内部の人間による通報という形で露呈したものが少なくありません。適正な利益を目指しつつ、社員の使命感、貢献感、自己成長感などを満足させることが永続的な繁栄を目指す企業にとって重要なポイントと言えます。小笹氏は「品格ある企業社には決まってその会社で働く人々を束ねる旗印の役割を果たし組織内部で語り継がれる伝説や武勇伝のようなものがある」と指摘しています。新潟県を本拠地として全国へ冷暖房器具の製造販売を行うC社。昭和三十六年・三十八年の記録的な豪雪により輸送路が寸断された際全国から届く石油ストーブの注文に何とか応えようと猛吹雪の中社員全員がストーブを一台ずつ担いで歩き注文に間に合わせたという「武勇伝」が残っています。この逸話はお客様を第一に思う伝統として現在の社員にも誇りとして脈々と流れています。経営学者ドラッカーも「たとえ天使が社長になっても利益には関心を持たざるをえない」と言っています。企業にとって利益は不可欠です。ただその作り出し方は多様なのです。「企業は人なり」のたとえ通り、トップから新入社員に至るまで、全員の事業に対する姿勢が社風を作り出し、事業の様々な場面で発揮され、利益にもつながっていくものと心しましょう。

社団法人倫理研究所法人局より

 今月のひとくちメモ 

いよいよ本格的な夏がやってきました。この季節に毎年必ずニュースになるのが「熱中症」です。屋外のみならず、屋内でも熱中症になる危険性は十分にありますので、こまめな水分補給や長時間直射日光に当たらないようにするなど、熱中症対策に十分な配慮をお願いします。

税理士法人 朝賀事務所